

ジョン・ロールズ著「正義論 改訂版」紀伊國屋書店 2010年11月24日刊を読む

1. 真理が思想の体系にとって第一の徳(the first virtue) (=何はさておき実現される価値)であるように、正義は社会の諸制度がまずもって発揮すべき効能(the first virtue)である。どれほど優美で無駄のない理論であろうとも、もしそれが真理に反しているのなら、棄却し修正せねばならない。それと同じように、どれだけ効率的でうまく編成されている法や制度であろうとも、もしそれらが正義に反するのであれば、改革し撤廃せねばならない。すべての人びとは正義に基づいたく不可侵なるもの>を所持しており、社会全体の福祉〔の実現という口実〕を持ち出したとしても、これを蹂躪することはできない。こうした理由でもって、一部の人が自由を喪失したとしても残りの人びとどうしでより大きな利益を分かち合えるならばその事態を正当とすることを、正義は認めない。少数の人びとに犠牲を強いることよりも多数の人びとがより多くの量の利便性を享受できるほうを重視すること、これも正義が許容するところではない。したがって、正義にかなった社会においては、<対等な市民としての暮らし>(equal citizenship)を構成する諸自由はしっかりと確保されている。つまり正義が保証する諸権利は、政治的な交渉や社会的な利害計算に左右されるものではない。誤った理論を黙認するのが許される唯一の条件は、その理論よりも優れたものがない場合に限られる。同じように真理と正義との類比に従うならば、さらに大きな不正義を回避することが必要である場合にのみ、そうした不正義を容認することができる。ともに人間の諸活動が達成すべき最重要の徳・効能であるがゆえに、真理と正義は非妥協的な性質を有する。

P6

2. 私たちが行なっていることは、お互いの振る舞いにおいて理にかなっていると——しかるべき熟考・反照を踏まえて——いつでも承認できる条件の全体を、ひとつの構想へと結合することである。ひとたび、この構想を把握したならば、いつでもこの要求された観点から社会的世界(実社会)を注視することができる。〔そのために専門的な知識や技術は必要ではなく〕一定の方法で理性を働かせ、その上で到達した結論に従うだけでじゅうぶん足りる。この観点は客観的でありながら私たちの自律を表現している。すべての人をひとつに合体・融合してしまふことなく、人びとを別個独立した存在として承認することを通じて、この観点は私たちが——時代をともにせず数多の世代に属している人びとの間でさえ——不偏・公平な立場に立つことを可能にする。したがって、この視座から社会における私たちの境遇を眺めることは、それを永遠の相の下に(sub specie aeternitatis)了解する業に等しい。すなわち、人間の状況をあらゆる社会的視点からのみならず、あらゆる時間的観点からも凝視することを意味する。永遠性の視座は現世を超えた場所からの眺望でもなければ、ある超越的な存在者の観点でもない。むしろ、この世界の内部にあって理性的な人びとが採用しうる特定の思考と感情の一形態なのである。そして、それを成し遂げることによって、人びとは——彼らがどの世界に属していようとも——すべての個人的視座をひとつの枠組みにまとめ上がることができ、各自の観点に発しながら、それに従って生活することがすべての人によって肯定・擁護される統制的な諸原理へと、連れ立って到達できる。心の清廉潔白(purity of heart)とは——もし人がそうした境地を達成しえたならば——〔心情的なものにとどまることなく〕こうした永遠性の観点

からものごとをはっきりと見据え、優雅にかつ自制的に行為することと変わらなくなるだろう。

P773 ~ 774

[コメント]

ロールズ先生の名著「正義論」。大著ではあるがとてもわかりやすいので、中学生・高校生でも十分に理解できる。キーワードや英語で示されている語句だけでもノートに取りながら、行きつもどりつしながら是非通読を。大学生、大学院生以上の方にとっては必読書。自分自身の価値観、何を大切に考えるかを築くのにとても役に立ちます。

— 2015年5月18日 林 明夫記 —